

Title	白井厚著 協同組合論集
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1992
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.84, No.4 (1992. 1) ,p.1061(319)- 1064(322)
JaLC DOI	10.14991/001.19920101-0319
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19920101-0319">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19920101-0319</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

白 井 厚著

『協同組合論集』

(慶應通信, 1991年9月, A5判223+xxxii頁, 3, 300円)

本書の著者、白井厚教授は、五島茂、都築忠七、永井義雄の諸教授とともに、ロバート・オウエン研究者として、また国際的な研究活動をもって著名な思想家であることは周知のところである。ここにとりあげた『協同組合論集』は、長年に亘る著者のオウエン研究史を総括する形で集約的に、独自のオウエン像を描き、オウエンを始祖とする協同組合運動の本質に肉薄し、その現代的意義を明らかにしようとした試みであるといえよう。

本書は、「ロバート・オウエン」、「協同組合の歴史と課題」、「国際会議から」および「本と報告書」の四章から成っている。「ロバート・オウエン」の章では、I ロバート・オウエンと日本、II [研究展望] 生誕二〇〇年(1971)以後のオウエン研究、III 事典類に現れたロバート・オウエン、「協同組合の歴史と課題」の項では、I 協同組合略史、II マルクス、レーニンの言葉、III 協同組合セクター論をめぐる近年の動向、IV 鶴を戻そう——協同組合運動の新しい波、の諸章から成っている。「国際会議から」では、I ニュー・ハーモニーにおける歴史的協同体学会から、II 韓国協同組合学会一九八五年度学術発表会、III アメリカの歴史的協同体学会サン・ディエゴ大会から、IV ストックホルムの国際協同組合同盟(ICA)大会、V 国際協同体学会の設立とニュー・ラナーク大会、そして最後に、「本と報告書」では、今井義雄教授の『協同組合と社会主義』、II 『西暦二〇〇〇年における協同組合』[レイドロウ報告]の改訳新版について、III 「マルコス報

告」の翻訳題名について——藤沢論文の批判に答える、IV 「マルコス報告」の特徴と問題点——国際協同組合同盟東京大会の討議のために、というきわめて多彩な内容となっている。

目次からも窺われるように、本書の前半は、ロバート・オウエンおよび彼の社会主義思想に基づく協同組合運動の研究史および研究動向の記述であるとすれば、後半は、著者のオウエンおよび協同組合思想の展開の部分というべきであらう。

白井教授は、『ウィリアム・ゴドウィン研究』(未来社, 1964年)の著者として、イギリス社会思想史研究にユニークな貢献をされ、とくにイギリスにおけるアナキズムの先駆者としてのゴドウィンの意義を、わが国の学界に認識させた最初の人である。と同時に、また社会主義思想史の導入について、実に克明な研究を行い、しかもそれを海外で開かれる学会において報告され、日本におけるオウエン研究の水準の高さを出席者に紹介するという貴重な、しかも著者白井教授にしてはじめて可能な業績を残されたことに、筆者は深い感銘を覚える。冒頭の「ロバート・オウエンと日本」は、日本におけるオウエン研究史の詳細な叙述であり、白井氏は、この内容を、1983年10月13日から15日にかけて、オウエンが、社会主義の実験を試みたアメリカ合衆国インディアナ州、ニュー・ハーモニーで開かれたアメリカ歴史的協同体学会主催の大会で報告され、また1985年には、韓国協同組合学会学術発表会でも報告されていることである。

読者はここで、わが国における社会主義及びオウエン主義研究に重要な役割を果たした多くの先輩に出会うであろう。筆者の個人的な学問的体験にひきつけて語ることをお許しいただきたい。白井教授は、ゴドウィン研究を媒介に、オウエン研究に進まれ、アナキズムの個性ともいべき協同主義の思想からオウエンに研究の重点を移されたように思われる。筆者は、社会政策研究者として、産業革命史研究の過程で、オウエンに出会ったものである。

著者も指摘されるように、東京商科大学（現の一橋大学の前身）で、上田貞次郎教授から、「産業革命史」の講義をうけ、そこでロバート・オウエンに非常に興味を持った関西学院大学の北野大吉教授と同じく（本書、12頁）、筆者もまた上田博士の名著『英国産業革命史論』に感動し、オウエン、チャーティスト運動そしてアーノルド・トインビー（Arnold Toynbee）を知った。だが、オウエンの偉大さを、労働組合運動の先駆的指導者としての役割を通じて認識させてくれたのは、五島茂教授の大著『イギリス産業革命社会史研究』（日本評論社、昭和24年）であった。グランド・ナショナル（Grand National Consolidated Trades' Union）形成の前史ともいべきドーチェスターの農業労働者の殉難史、トルパッドル事件に刺戟されて奮起した労働者を、一大全国的産業別組合に組織したのは、ほかならぬオウエンであった。筆者はこのようにして、次第にオウエンに近づき、やがて、ナポレオン戦争後の工場法改革運動で、社会政策としての工場法制定に活躍する彼の行動のなかに、卓越した社会改良主義者オウエンを見出すのである。この点については、著者もかなり詳細にふれている（本書、64頁～67頁参照）。やや個人的体験に深入りしすぎたかもしれない。本論に戻ろう。

著者は、「ロバート・オウエンと日本」のなかで、オウエン研究前史ともいべき小崎弘道の「近世社会黨ノ原因ヲ論ズ」、石谷斎蔵『社会党瑣聞』についてふれた後、本格的なオウエン研究の幕明けを告げるものとして、河上肇『社会問題研究』（大正10年）、および本位田祥男の『協同組合論』（昭和4年）をあげておられる。そしてさらに、研究のより成熟した段階として、わが国オウエン研究の到達点ともいべき五島茂教授の『ロバート・オウエン著作史一協同の一研究』（1932年）の重要性を指摘しておられる。

筆者が注目したいのは、この五島先生の著作についてふれている白井教授の言葉のなかで、つぎの一節がきわめて鮮烈な印象をわれわれに

あたえるのではないか、ということである。

マルクスは今年死後百年（1983年……引用者）だというので、マルクス護教派、葬送派などからいろいろな評価が出ていますが、マルクスの用語において今面白い問題になっているのに、“ユートウピア”という言葉がありません。マルクスとエンゲルスは、ユートウピアン・ソウシャリストの代表者としてオウエンを挙げている。自分たちの科学的社会主義だと豪語している。ということは、社会主義は空想から科学へと高まったんだ。だからユートウピアンはマルクスによって克服されたんだ、という見方をとれば、オウエンは単にマルクスの前史を飾る思想家にすぎない、ということになりますね。

筆者も、マルクスとエンゲルスによって名づけられた「ユートピア社会主義者」という用語に疑問を感じていた。続いて著者はつぎのように言われる。

「しかし今は、マルクス主義者の中でもこういう見方は次第に少なくなりました。むしろユートウピアンであることが、重要な意義を持つと考えられるようになり、マルクス主義自体が一つのユートピア思想ではないか、と言われるほどになっています。

以上の見解は、一般によく指摘されるところであるが、つぎの文章は、決定的に重要である。

「レーニン主義、スターリン主義、毛沢東主義などの持つ問題は、マルクス主義の持つヒューマニズムやユートピア性を失わせたところにあるのではないか、とも考えられるわけです」（本書18頁）。

科学的社会主義の名において、マルクス主義を神聖視し、絶対化するという風潮のなかで、今日の東欧およびソヴェートの政変がおり得たのである。筆者自身の体験に即して考えてみるに、私は、マルクス、エンゲルスのいうところの“Utopische Sozialismus”という考え方にある種の抵抗感をもっていた。それは、オウエンのニュー・ラナークにおける社会主義的实践、

1815年以後の工場法改革運動への積極的貢献、そしてさらにアメリカ、インディアナ州、ニュー・ハーモニーにおける社会主義的実験、その失敗した後英国に帰り、労働組合運動への参加とグランド・ナショナル運動の提唱などの旺盛な実践活動を知るにつれて、オウエンの思想が、“ユートピア的”と呼ばれるにはふさわしくないことを痛感するに至った。

偶然、ウェルナー・ゾンバルト (Werner Sombart) の『社会主義と社会運動』(Sozialismus und Soziale Bewegung, 1897) を読み、そのなかで彼が、オウエンの運動にたいして“Rationale Sozialismus”「理性的社会主義」としているのを発見し、こうした名称こそ、Owenism にふさわしいと考えるに至った。

著者は、つぎに、「[研究展望] 生誕二〇〇年以後のオウエン研究」において、1971年以後のオウエン研究の、日本および海外における動向について、きわめて詳細な研究を行っていて、オウエン研究をテーマとする人々にとって恰好な手引きともいえよう。とりわけ「ニュー・ハーモニー研究(外国文献および日本)」は貴重である。

しかしもっとも興味深いものは、「Ⅲ事典類に現れたロバート・オウエン」における著者の詳細な探求であろう。オウエンは、社会主義、労働組合運動および協同組合運動における先駆者であるが、著者も指摘されるように、「オウエンの問題意識は、分業によって急速に高まった技術・生産力を、労働者階級の真の幸福と結びつけるような社会(協同体)の建設であった」(70頁)。だが、オウエンの天才的発想は、この理想社会の建設にあたって、貨幣の廃絶を実現するために、1832年にロンドンで設立された国民公平労働交換所であろう。著者は、カンボジャで一時、政権を掌握したポル・ポト派は、中国共産党の影響下にあったとはいえ、オウエンの着想から、何らかのヒントを得ていたのではないか、と思う。尤もポル・ポト派の思想は、オウエンとは似ても似つかぬものではあったが。

「協同組合の歴史の課題」、この項目が、本書のもっとも中心的な部分であり、また著者の協同組合思想がもっとも明瞭にあらわれている興味深い文章が豊かにちりばめられている。とくに、「Ⅳ 鶴を戻そう——協同組合運動の新しい波」は、1983年4月23日、日本労働者福祉研究協会において行った講演をまとめたものであるが、山本安英主演の「夕鶴」から、現代社会を襲う疎外化現象を連想し、真に人間らしい社会をとり戻すために、協同組合の思想が不可欠であることを、非常にユーモラスな、また魅力的な表現で説得しようと著者は努力していることが、読む者の心に伝わってくる。読者は、この文章から、さまざまな示唆をうけることができるであろう。筆者にとって興味深かったのは、この章の最後の部分、「鶴を戻そう」というところである。

マルクス、エンゲルス、そしてその後継者レーニンにとって、共通してもっとも刺激的であり教訓的であった事件は、1871年のパリ・コミューンであったろう。マルクスは、『フランスの内乱』において、パリの労働者の革命的行動を讃え、エンゲルスは、そのなかに、「プロレタリア独裁の見本」をみたのであった。レーニンは、『国家と革命』において、マルクス、エンゲルスの認識を歴史的に再確認したのであった。共同体が根強く残存する遅れたロシアにおいて、レーニンは、これを協同思想の基盤として利用し、来るべき共産主義社会への移行を準備しようとしたが、レーニンの死後、ソヴェート社会は、予期しなかった方向に歩みはじめた。そして今日の、ソヴェート共産主義解体という深刻な事態をもたらしたのである。

筆者は、この書を読んでいるうちに、共産主義世界の崩壊は、オウエン主義を克服したとする偏見とアナーキズムにたいするはげしい敵愾心が、大きく影響していたのではないか、と思う。

著者白井教授は、アナーキズムには直接ふれられていない。しかしゴドウィンが、イギリス

における無政府主義の先駆者であったとすれば、以上のことは十分に意識されているはずである。筆者は、レーニンが、パリ・コンミュンを通じて、アナキズムそしてその労働組合運動の思想ともいうべきブランキズムの威力を十分に意識していたと考える。マルクス、エンゲルスそしてレーニンも、パリ・コンミュンのなかに、後の、いわゆる統一戦線を見出したのではなかったか。コンミュン政府の樹立に参加した労働者のなかに、マルクスの影響を受けた者は少なく、第一インターナショナルはこの運動とは無関係に近い状態で、むしろ、アナキスト、ブルドン主義者およびブランキストが圧倒的大部分を占めていた。

ロシア革命の場合でさえ、さまざまな思想集団や労働者の統一の行動なしには成就し得なかったであろう。しかし、レーニンが、パリ・コンミュンのなかで発見し、夢みた統一戦線、協同の思想はその後歪曲され、プロレタリア独裁は、「官僚によるプロレタリアートにたいする独裁」となった。「協同組合の歴史と課題」と題する本書の中核的な章は、現代社会の変革を、アナキズムなどの、従来、その役割が軽視され、もしくは誤解されてきた思想をも組み入れることによって、はじめて行いうるものであることを読者に訴えている。

最後の「国際会議から」は、著者が精力的に

出席したニュー・ハーモニーでの学会、ストックホルムの国際協同組合同盟、ニュー・ラナークでの国際協同団体学会などの模様を叙述したものと、書評および報告書の紹介で、とくに報告書については説明不足の感をまぬがれない。

本書の最大の特徴は、オウエンおよび協同組合の研究者にとって、きわめて懇切な案内書であるとともに、協同組合運動の実践家にとっても、運動の歴史的意義を考察する意味で、裨益するところ大きいと思われるので、塾生のみならず、生活協同組合の運動家ならびに実務家の諸君に、是非、一読をお奨めしたい。

ただ、本書は、論文集のような体裁をとっているため、やや叙述が重複するところもあり、また書評も、今井義夫氏の著作のみ、というのは淋しい。いま少し多彩な著作についての著者の見解をききたかったと思う。

筆者個人としてみれば、著者が、二〇年も前の筆者のオウエンにかんする論稿を、度々とり上げていただき、いまあらためて、あの頃の自分の学問的活動を回顧することができ、感謝致している次第で、また白井教授が、『慶応義塾消費組合史』という大著の監修者として、高い評価をうけられたことについても、祝福の言葉を、末尾乍ら記させていただくものである。

飯 田 鼎

(名誉教授)